

茶碗之中

雪羽





ちやわん なか  
茶碗の、中  
試し読み版

雷羽 著  
Ground Top 小説

# 「茶碗の、中-ちゃわんのなか-」

## 目次

- 一、[茶碗の、中](#)
- 二、[書籍情報](#)

## 楽曲

楽曲始、「金木犀」笹川美和  
楽曲終、「ケモノ」東京エスムジカ

## 人物

関内（せきない）  
式部平内（しきぶ へいない）  
松岡平蔵（まつおか へいぞう）  
土橋文吾（つちばし ぶんご）  
岡村平六（おかむら へいろく）  
中川久恒（なかがわ ひさつね）

本ファイルはサンプルです。  
「茶碗の、中」の始め二ページを試し読みできます。  
以降は本編でお楽しみ下さい。  
サンプルとして、一部内容が異なります。

## 茶碗の、中

とてもでは無いが、年始の挨拶回りは年繰る度に辛いものがある。別に関内の体力が無い訳じゃない。足の遅い下男を連れて歩くのは些か疲れるのだ。朝から上司の中川佐渡守に付き添って、そして疲れを見せずに目上と一刻を過ごす。今のでもう二十余軒になる。まだ三十はあるというのに、下男はぐうたらと歩いているではないか。

「おい、今日中にあと三十軒を訪ねるのだぞ、そのくらいで疲れていてどうする。」

「へい」とだけ小声で呟く下男に関内はほとほと呆れながら、前を振り向くと、目先に茶屋を見つけた。中川が再度下男を見比べながら、「寄る」と呟いた。

「おやおや、年始の挨拶回りで。ご足労に存ぜ上げます。」

店主が今日だけで五人くらいは見たであろう年始回り客に愛想を撒きながら、赤い布地に腰をかけた関内の横に茶を置いた。刀を重い音とともに側に置くと、茶を手にした。

中川は下男は長椅子に座りもせず、店の隅に地べた座りながら飯を取り出していた。

茶が日の光を反射して揺らめいた。

「うぬ。」

茶を口に運んだ関内が目を細めると、茶の中に微か人の姿が見える。関内の顔の奥、茶碗の底、茶と関内の間に無ければ映らないはずの

茶の中には一人の武士が映っていた。頭の前から、足の先まで、反射を考えれば、まるで一寸法師のような小ささだ。よく顔を見れば薄らと笑いかけているようにも見える。

「おい店の者。この茶碗の内底には絵が描いてあるのか。」

「へ？んなこたあござえやせん、見ての通り、ただの茶碗にござえやす。」

店主は少し不思議そうな顔を浮かべた。

「茶碗の中に何か居る。」

そういう関内の言葉に、店主が茶碗の中を覗いてみたが、何も見えない。

「何もござえやせんが？見間違いじゃあねえですかい？」

「年始めというのに、何とも薄気味の悪い。」

関内がまた茶碗を覗いてみると、またあの男が映っていた。その姿は茶でゆらゆらと揺れている。すっかり気持ち悪くなった関内はその茶を一気に飲み干した。空の茶碗には何も映っていない。そのうち中川が立ち上がり、出発を促した。

その夜、夜番をしながら関内は昼間のことを思い出していた。ゆらゆらと揺らめく蝋燭の明かりを眺めながら、その場から体一つ動かない。蝋燭の炎というのは、何とも眠気を誘うものだ。権内は重い瞼を何度も閉開しながら睡魔と戦っていた。

関内が瞼を開いた時、目の前に男が立っていた。体が跳ねるように驚き、直ぐに刀に手を伸ばす。それが武士としての癖だ。

薄暗い部屋の中で、その男の顔には見覚えがあった。それは刹那のうちに解せた。

「貴様、何者。」

「関内殿。私は式部平内でございます。昼にもお見かけしましたが、存じませぬか。」

「茶に浮かんでいたあの男、貴様か。」

「然様でございます。」

揺らめく炎で燈に照らされるその微笑みは、まさにあの茶のものと同じだ。薄暗くてよく見えないが、男はまだ若いようだ。それにしてもこの界限で式部という姓は聞いたことが無いし、関内を知っているとすればこの藩の者以外にない。

「式部だと？上方の者か。いや、袴ならば武家か。」（上方かみがた：関西地方、公家）

「いやはやに。私など貴方様の御家と到底比類して足らぬものでございます。無礼とは存知つつもこうして御前にお伺い立てて居ります。」

「此処をどこで見受ける、中川佐渡守が御屋敷なるぞ、曲者と見て御免遣わす！」

関内の睡魔はもはや頭から逃げていってしまったようだった。足音、気配一つ立てずに関内の目の前に現れたその男を実に気味悪がりながら、刀の擦れる音が鈍く響いた。その刀先が式部に向けられたが、式部は顔色一つ変えずに

平然と関内に近寄った。

「おや、彼様な忌まわしいものを容易く振り翳せるご身分とは思えませぬが。」

「何所の馬の骨ぞ分からぬ怪脊者が戯けおって。」

やあと刀を振るうも、式部はそれをあつさりと避けた。まるで氷の上を滑るような滑らかな動き、余裕があるかのように関内の刀を見定めているようだ。

ますます気に入らない。関内は式部を追うなり肩から刀を下した。

斬ったはずだ。いや、切れていない。式部の表情は変わらず涼しい顔を保っていた。不思議なのは蠟燭が関内の動きに合わせてしか揺れていないのだ。

「私をお斬りになったところで、貴方様には何の得もあらんと存じますが。」

「黙れ、俺に何の用がある。」

「ふふふ。」

目を細めながらすつと関内に歩み寄った。ふわつと漂う奇妙な空気に、関内の手はがたがたと震え始めていた。冷や汗、荒らむ呼吸、それらを見透かすような式部の目は、まるで関内の全てを知っているかのようだ。

「き・・・貴様・・・。」

奇妙な空気に包まれて暫し、関内が声を絞り出した時、すでに体は動かなかった。恐怖なのか警告なのかはわからない。数十年武士を勤めて、このような感覚は始めてだった。

「貴方様の全てを頂きたく。」

「ど、どういうことだ。」

式部の手が関内の頬に触れると、まるで絹が触れているような、人肌ではない何かが触れているような感覚を持つ。その指は顎に沿って線を描くと、顎の先から鎖骨へ一筋を辿る。

「式部・・・」

袴の紐を緩めて床に落とし、後に続いて紺の腰帯が静かに床へ落ちていった。

揺らめく蠟燭の光が妖艶に二人の姿を映し出す。

押さえるものが無くなった着物は、関内の肩から垂れ下がるだけだ。実戦に相応しく武士らしい厚い胸板と割れた腹が呼吸とともに動いている。

「さあ、関内殿、もう迷わずに私に全てをお預け下さい。この御体の色も性も私が癒して差し上げます。」

「そのような甘い誘いに俺は乗らぬぞ。」

「関内殿、心と体は必ずしも同じにありませぬ。いくそ関内殿が鋼の心をお持ちでも、体は果たしてや。」

関内の首元を舌でべろりと舐めると、式部の手が関内の禪に触れた。関内の体が小刻みに跳ねつつも、息を飲んでその刺激に耐えようとする。

「佐渡守に心身して仕える余り、奥方にはご無沙汰のご様子。彼様な禁欲の檻に入ってはさぞかし溜まって居られましょう。」

式部の妖しい手と指の動きに一挙一動として反応を示す関内の体。禪に浮かび上がる筋をなぞられれば、全身が震わずにはいられない。

「俺の・・・欲・・・そのようなものを男に晴らしてもらうほど、俺は落ちぶれては居らぬ。」

「ならば何故、私をお寄せになる。」

関内の腕は無意識の内に式部の背中を抱き抱えていた。

そっと着物を肩から外す式部。自動的に関内の腕からすり抜けて、関内は禪一つだ。全身に汗を伴い、震え、禪を弄られる度に式部を着物を掴み引いた。

「流石、武士ならではのお逞しき御体。関内殿、男の体を存じていますのは男だけにございます故、私ならば関内殿のこの欲で飢えておられる御体を満たして差し上げられましょう。」

まるで操られているように、関内の手は式部の袴紐を解いていく。そして式部の服は次第に崩れ、互いの禪を緩めた。二人の男の裸体が部屋の壁に照らし出される。

畳の上に押し倒された関内。式部の指が下半身に伸びる。汗で湿った肉壺の口は簡単に解ける。指で周りを撫でながら、褌を擦りつつ指を押し込んでいけば、どんな男の体でも容易に侵入出来ることを、式部は知っていた。すっかり褐色に沈着した乳首を吸うだけで、肉壺は指をきつく咥え込む。

関内の熱い吐息が部屋の温度を上げていった。

「あ・・・うう・・・」

肉壺の奥まで指が達した時、その口を更に広げるように二本、三本と指を増やしてゆく。そしてその指たちは関内の肉壁を擦り上げ、肉褌を弾いて、徐々に関内の体内を蝕んでいった。それに対応するように、膨れ上がる逸物を関内

## 茶碗の、中（サンプル）

著 者 雷羽  
イ ラ ス ト 雷羽  
発 行 二〇一〇年三月  
管理コード df-018634wbvp\_s  
著 作 権 Ground Top by LeiYu  
定 価 試供品

## 個人販売元

Ground Top <http://groundtop.sakura.ne.jp/>  
雷 羽 [banji.jp@gmail.com](mailto:banji.jp@gmail.com)

Printed in Tokyo, Japan.  
All Right Reserved.